

うまく生きるより 良く生きる
—深田未来生先生を覚えて

越川 弘 英

奨励者紹介[こしかわ・ひろひで]

同志社大学キリスト教文化センター教授

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(礼拝、宣教、牧会)

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。

(マタイによる福音書 16章 26a節)

神の存在証明

私がキリスト者となってから40年あまり経ちますが、この間、神という存在を直接見たり、その声を聞いたりした経験はありません。それなのにどうして神を信じるのか、信じられるのか。自分でも不思議なくらいです。

昔からキリスト教では「神の存在証明」が大きな問題とされてきました。長年にわたっていろいろな人がいろいろな説を立て、神は確実に存在すると証明しようとしてきましたが、どうも私の印象では決定的な理論は未だに定まっていない感じです。結論を先取りしてしまうと、神の問題というのは、結局、まず最初に自分が神を信じるかどうかという決断や意志の問題であって、神の存在証明という理屈は後からついてくる問題のようにも思われるのです。

ただ、自分自身が40年あまりキリスト者として生きてきて、この問題について一つ言えることがあるとしたら、神の存在を直接に証明できるかどうかかわからないけれど、間接的なかたちでならば証明することはできるかもしれないということです。つまり私よりも前に神を信じて生きた人たちの存在、その人々の信仰的な生き方が、神が存在することを間接的な形で証しすることができるのではないかと思っています。

浄土真宗の開祖である親鸞は、『歎異抄』の中で、自分の信仰を導いてくれた人物として法然という人物を挙げ、次の有名な一文を草しています。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと(法然)の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細(しさい)なきなり。」

「たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。」

要するに、自分は法然の教えを信じて自分の信仰を貫いているのであり、仮に法然の教えが間違っていて、法然にだまされ、その結果、地獄に落ちることがあっても後悔はしないと云うのです。親鸞は法然を「よきひと」といい、彼を信頼して仏教徒としての自らの生き方を決めたのです。

宗教の世界では、このようにある人物がその人格や生き方を通して神や仏を指し示すことが起こることがあります。そして別の誰かがその人と出会って、その人物を信頼し、信仰の道に入ることがあるのです。

極論すれば、私が今キリスト者であるのは、私が出会った人々がたまたま（あるいは神の導きによって？）キリスト者だったからであり、そういう人々によってたまたまキリスト教に導かれた、ということなのでしょう。宗教として仏教の方がキリスト教より優れた宗教であるのかどうか、私は知りません。いずれにしても、私にとってはキリスト教で十分であり、その人格と生き方を通して神の存在を指し示してくれた人々と出会ったことが決定的だったのです。

深田未来生先生の思い出

私にとってそのように神を指し示してくれた方、キリスト者の生き方を示してくださった方のひとりが、昨年6月25日に89歳で天に召された深田未来生先生でした。深田先生は同志社大学神学部の教授で、私は大学生だった頃から社会に出た後まで含めて、本当にいろいろなお世話になりました。深田先生はその生涯において日本とアメリカの両国にまたがる歩みをなされた方であり、福祉の現場や教育の分野で、また宣教師として教会で働き、実にさまざまな活動をなされた方でした。

先生の略歴を申し上げておきましょう。1933年、アメリカ・カリフォルニア州で生まれる。4歳で日本に帰国し、自由学園幼児生活団に入学し、高校一年まで学ぶ。その後、単身で渡米し高校を卒業。1955年、ベーカー大学在学中に召集令状を受けアメリカ陸軍に入隊。除隊後、ボストン大学神学部、クレアモント神学大学院に学ぶ。1960年、アメリカ合同メソジスト教会宣教師としてご夫婦で来日。京都の西陣労働センター（現在、京都市民福祉センター）館長を務め、同志社大学神学部では1966年から2004年まで働かれました。

私は1978年からおよそ10年、同志社で深田先生の教えを受けたのですが、さて具体的に何を教えてもらったかという点、どうもはっきり思い出せません。神学英語とか、説教とか、牧会臨床訓練とか、いろいろ講義はとったのですが、身についたかどうかはどうもあやふやです。

私が覚えているのは授業よりも、先生の研究室に入り浸っていたことの記憶です。深田先生の研究室は、ほかの先生たちの二〜三倍も大きな部屋でした。その部屋には学生がいつでも自由に入出入りできるようになっており、大きなテーブルがあって、皆勝手にそこにあるコーヒーやお茶やらを入れては呑む。部屋の奥でタイプライターを打ったり、いろいろ仕事をしている先生とたまに言葉を交わしたり、黙って時を過ごしていた自分を思い出します。

後になって考えてみると、そのころの私は深田先生の人生とか働きについてはほとんど知らなかったのです。昨年、先生が書かれた最後の本（木村利人共著『ボクたちは軍国少年だった!』キリスト新聞社2022年）の中で、自伝的なことが書かれており、今まで知らなかった深田先生のさまざまな面も知ることができました。その本の中に「うまく生きるより、良く生きる」という章があります。先生が80代の終わり頃、いろいろなものを処分していた時に、一枚の黄ばんだメモ用紙を見つけたというのです。それは「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか／うまく生きるより 良く生きる」と記された自筆のメモだったそうですが、いつ書いたのか思い出せなかったそうです。聖句はマタイによる福音書から、「うまく生きるより 良く生きる」は深田先生の言葉です。

深田先生の本から少しお読みします。

「この紙切れを捨てようと思った瞬間、私は一瞬心臓の鼓動が止まるような気持ちに襲われた。良く生

きるという意味を味わいなおしていたのである。人間の社会は、うまく生きる人が支配しがちである。上手と言ってもよい。要領よくと言っても良い。だけど聖書が求める生き方はそうではなく、神が求めておられる一人ひとりが与えられている賜物と使命に忠実に、その神の本質を反映して、創造的に生きることではないだろうか。何度も考えたことであり、学生たちにも語ったことではなかったか。」(同161頁)

「うまく生きるより、良く生きる。」

それは確かに深田先生の深田先生らしい言葉であると思います。

深田先生はまた人間同士の関係、交わりということをととても大切にされた方でした。深田先生の文章から二つ紹介します。

「人生には様々な体験と経験がある。苦痛は多く、時には希望は消え失せそうに見えることもある。しかしその逆もまた数え切れないほどある。喜びや、楽しさ、おかしさ、面白さ、美しさ、圧倒されるような感動など、俗にいう『生きていてよかった』と感じる体験や経験は誰にでもあるはずである。そして考えてみると、そのような体験は単独の、一人のものではなく、他者、自分以外の人の関わりから生まれていることに改めて気がつくのである。」

「記憶をたどりながら人生の道のりに光を当ててみたとき、私は自分がどれだけ多くの人々の友情、叱咤激励、指導、愛情によって支えられ導かれたかに思いをさせ、心が温められる体験を繰り返すことができるのである。」(以上、同157～158頁より抜粋)

人は人によって支えられ、人は隣人との良い交わりの中で豊かな人生を生きるということを、先生は語っておられるのでしょ。

三つの感覚

深田先生を思い出すたびに、私にはいつも三つの感覚が湧き上がってきます。

第1は、自分がその人に受け入れられているという感覚。圧倒的な受容の感覚、無条件の受容という感覚です。それは自分の存在が認められているという感覚であり、自分に居場所があるという感覚であり、基本的な安心感につながる経験です。

第2は、「叱られている」という感覚です。「君はそれでいいのか」と問われる感覚です。実際には深田先生から言葉や態度で叱られたという覚えはありません。しかし深田先生を思い出すたびに、私は問われている・呼びかけられているという経験を新たにします。「越川、うまく生きようとしていないか。良く生きているか。」そんな感じでした。

第3に感じるのは、「それでも励まされている」という感覚です。それは「頑張れ」というのとは少し違って、「大丈夫だ」「安心しろ」という感じの呼びかけです。私を励まし押し出してくれる経験です。

私の場合、深田先生はキリスト教というつながりのもとで出会った「神を指し示す人」として、今も生きて語りかけ・問い・励ましてくださる方です。神を信じ、人を愛し、「うまく生きるより、良く生きる」ことを、深田先生は私に示し続けてくださいます。私が今もってキリスト者であるのは、深田先生のような多くの方たちがすでにキリスト者であったから、良い生き方を示してくださったキリスト者であったから、という事実にもっとも多くを負っているように思います。

キリスト教とか宗教ということをして別にして、皆さんの中にも、おそらく私が経験するような感覚を呼び起

こしてくれる方との出会いや思い出をおもちの人は何人もおられるのではないのでしょうか。その方が、たとえすでに天に召された方であったとしても、その人を思い起こすたびに、生き生きと語りかけ・問い・叱り・励ましてくれる、そして受け容れられている感覚がよみがえってくる。そういう経験が実は私たちが生きていくうえで、もっとも大切なことなのではないかと思えます。

人は他の人との関わりの中でしか人間となることはできません。良いキリスト者となるためには、良いキリスト者との出会いが欠かせません。良い仏教徒となるためには良い仏教徒との出会いが欠かせないのだらうと思えます。そして良い人間となるためには良い人との出会いが欠かせないのです。

そのような出会いは私たちの計画や思惑通りに起こることではなく、「なにものか」の力によって備えられ、贈り物として私たちに与えられる、予期せぬ出会いです。そうした贈り物としての出会いをしっかりと受けとめ、それに感謝しながら、私たちの人生を誠実に歩んでいきたいと思うのです。

2023年7月 26 日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録